



草花

ブックフェア



2018年3月3日（土）～5月14日（月）

春がやってきました！

今年はお散歩しながら道端の草花を楽しみませんか？

そんな時に役に立つおすすめの花の図鑑や、植物にまつわる新刊本をそろえます。

石巻まちの本棚 〒986-0822 石巻市中央 2-3-16 かん書房ビル1F
OPEN（土）（日）（月） 11:00～18:00 <http://bookishinomaki.com/>

さんぽの図鑑



「野草の名前 春 和名の由来と見分け方」
「野草の名前 夏 和名の由来と見分け方」
「野草の名前 秋冬 和名の由来と見分け方」
(高橋勝雄 著/山と溪谷社)

以前から定評のあった、ヤマケイの野草の名前図鑑が文庫サイズになりました。春・夏・秋冬の3分冊になっています。花の名前の由来がわかると、名前もちょっと覚えやすくなりますよ。



「色で見わけ五感で楽しむ野草図鑑」
(高橋修 著/ナツメ社)

代表的な野草を写真を交えて543種類掲載。そのため、比較的コンパクトではあるのですが重量感あり。初心者が探しやすいように、7系統の花の色に分類してあります。「見る、聴く、かぐ、触る、味わう」の五感を使って野草を愉しもうというところもテーマの1つ。



「散歩で見かける四季の花」
(金田 一 著/日本文芸社)

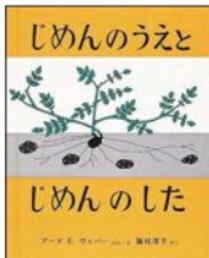
野の花ばかりではなく、庭や公園に咲く園芸種も含め、四季折々の花が紹介されています。これまで気になっていたよそのお宅に咲いていた花も、これで名前が分かるかも…。

お子さんと一緒に楽しむ



「ざっそうの名前」 (長尾玲子 著/福音館書店)

なんと、全編「刺繍」で描かれている驚異の本。おじいちゃんに雑草の名前を覚えてもらう男の子のお話ですが、大人はついついその美しい刺繍に目が行ってしまいます。刺繍なのに草花の特徴を見事にとらえていて、植物好きのみならず手芸好きの方にもオススメ。



「じめんのうえと じめんのした」 (アーマ E. ウェバー 著/福音館書店)

50年近く愛されている、デザインも魅力的なかがく絵本。植物の葉っぱや根っこのしくみ、ほかの生きものとのつながりなどを、小さな子どもたちにわかりやすく教えてくれます。



「校庭のざっ草」 (有沢重雄 著・松岡真澄 絵/福音館書店)

校庭などによく生えている雑草をとりあげ、花の色やかたちから、名前を調べることができます。名前がわかるといままでもあまり気にならなかった草花が、急に身近に感じられるはず。しらべ学習の第1歩としていかがでしょうか。対象は小学校低学年から。

植物エッセイの名作



「園芸家の一年」 (カレル チャペック 著／平凡社)

庭づくりを愛する人たちの愛読書といえばこれ。戦前のチェコの作家、カレル・チャペックの名著。お兄さんによるイラストもかわいくて、ユーモアたっぷりの文章に心も軽くなります。今も昔も、日本だろうがチェコだろうが、園芸家は万国共通のスピリッツを持つものなんです。 (いとうせいこう解説)



「ボタニカル・ライフ—植物生活」 (いとうせいこう 著／新潮社)

いとうせいこうさんは、ベランダで花を育てる「ベランダ派」。「植物男子ベランター」として、この本を原作にドラマにもなりました。いとうさんの植物との暮らしを綴った園芸エッセイ。チャペックの「園芸家の一年」を意識して書いたそうです。続編の「自己流園芸ベランダ派」(河出文庫)もあります。



「牧野富太郎 なぜ花は匂うか」 (牧野富太郎 著／平凡社)

植物学者、牧野富太郎の厳選エッセイ集。植物のこと、植物と共に歩んだ植物 LOVE の人生が語られます。この STANDARD BOOKS シリーズは科学と文学を行き来する人たちのエッセイシリーズ。他のラインナップも良書が多いのでオススメです。

ボタニカルアート。



「シーボルト 日本植物誌」 (P.F.B. フォン シーボルト 著／筑摩書房)

江戸時代後期に日本にやってきた医学者シーボルト。博物学者としても有名です。日本の植物を初めてヨーロッパに紹介した人物でもあり、本人が描いた美しい彩色図版は植物学的にも、民俗学や文化史の観点からも、またボタニカルアート（植物画）としても、今も高く評価される貴重な資料です。その図版 150 点と解説を文庫サイズで気軽にどうぞ。



「野の花の本 ボタニカルアートと花のおとぎ話」 (解説・監修 海野弘)

野の花のボタニカルアートだけでなく、幻想挿絵（花の妖精達！）や花の文様・装飾画などが、解説つきで紹介されている図版集。230 点も収録されているので、花のアートをたっぷり堪能できます。



「子どもと一緒に覚えたい 道草の名前」 (稲垣栄洋 著・加古川利彦 絵／マイルスタッフ)

美しいボタニカルアートを使ったビジュアル図鑑。解説もわかりやすく、親子で野の草花を楽しむのにぴったりです。絵がきれいなので大人の方でも是非。

植物とがっぷり四つで



「コケの自然誌」

(ロビン・ウォール・キマラー 著／築地書館)

コケがどんな暮らしをしているかのお話なのですが、科学の読み物というよりは、コケの世界を描いた文学のようなノンフィクションです。コケが暮らすミクロの自然の中に、自分も一緒に入ってきたような静かな余韻にひたれます。



「植物が出現し、気候を変えた」

(デイヴィッド・ピアリング 著／みすず書房)

見た目は非常にハードルが高い本ですが、植物がいかに環境や気候を変えてきたのか、最近の研究や学説を交えて、地球規模の大きなスケールの話が展開されます。それに比べると人間は地球にとって害でしかないのでは…。あらためて植物の偉大さに感服させられる1冊です。

「石巻まちの本棚」では、本の貸し出しや古本などを販売をしています。本棚の本はお一人様3冊まで2週間借りることができます。初回のみ登録料200円をいただきます。もちろん店内で読んでいただくこともできますので、お気軽にお立ち寄り下さい。

新書で気軽に



「カラー版 - スキマの植物図鑑」 (塚谷裕一 著/平凡社)

暖かい季節、コンクリートやアスファルトばかりの街中でも、必ずスキマ植物に出会うことができます。登場する植物たちのスキマでの奮闘ぶりがなんともけなげで愛おしくなることうけあいです。道端の植物図鑑としてもご利用下さい。続編の「スキマの植物の世界」もあります。



「カラー版 世界の四大花園に行く - 砂漠が生み出す奇跡」 (野村哲也 著/岩波書店)

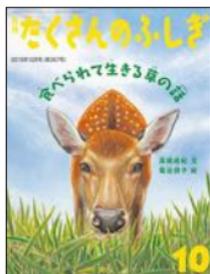
はじめてこの光景を（写真で）見たとき、世の中にこんなきれいな花園があるのかとびっくりしました。おそらく生きているうちに自分の目でみることはないだろうと思われるこの絶景を、手軽な新書サイズでごらんあれ。



「日本人ときのこ」 (岡村稔久 著/山と溪谷社)

「草花」とは少し違うけれど、日本人が古来からきのこに親しんできた「きのこ文化」の歴史をたどるお話。危険をおかしてまできのこ狩りがやめられない気持ちがわかるかもしれません。

実は石巻に関係のある草花本。



月刊たぐさんのふしぎ「食べられて生きる草の話」
(高槻成紀 著・菊谷詩子 絵/福音館書店)

小学生向けの雑誌ですが、この号はなんと金華山が舞台。世界で金華山にだけ自生する日本芝（ノシバ）とシカの不思議なつながりのお話。著者の高槻先生は40年も金華山で研究を続けていて、この本を通して私たちに自然をよく観察することを教えて下さいます。



「身近な雑草の芽生えハンドブック」
「身近な雑草の芽生えハンドブック2」
(浅井元朗 著/文一総合出版)

雑草たちも芽生えの季節。雑草との戦いには雑草を知ること大切です。厄介者はまだ芽のうちに抜いてしまいたいですね。このハンドブックは、若葉のうちに雑草の名前を調べようというもの。

そして、著者は石巻出身の雑草博士、浅井元朗さん。お名前にピンと来た方は、第2巻の巻末にある著者紹介スケッチに注目！

この冊子で紹介している本は、フェアで販売する新刊書です。期間中、品切れの場合もございますのでご了承下さい。フェアでは関連した古本なども販売する予定です。

2018年7月28日（土）には、「石巻一箱古本市」を開催します。店主として参加したい、当日お手伝いして下さる方を募集しています。詳しくは本棚スタッフか bookishinomaki@gmail.com までご連絡下さい。

発行：石巻まちの本棚 × くものす洞
文責：くものす洞 (kumonosudo@gmail.com)

(2018年2月)